



TITLE:

<批評・紹介> 傅筑夫著「中國經濟史論叢 上・下」

AUTHOR(S):

佐藤, 武敏

CITATION:

佐藤, 武敏. <批評・紹介> 傅筑夫著「中國經濟史論叢 上・下」. 東洋史研究 1981, 40(1): 154-160

ISSUE DATE:

1981-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153807>

RIGHT:

批評・紹介

傳 筑 夫 著

中國經濟史論叢 上・下

佐 藤 武 敏

一

中國における中國經濟史の研究はかつての分期論爭を中心とした時期を経て最近、史料集の刊行、數多くの著書・論文の發表などの現象からすると、少くとも外面的には多様化と深化を示しているように見える。昨年刊行された本書は上・下冊合せて七七〇ページにおよぶ大著で、最近の中國經濟史研究の代表的な業績の一つと云つてよいであらう。著者は傳筑夫氏となつてはいるが、筑は簡體字で傳築夫氏のものである。著者について私はよく知らない。ただ以前、「中國資本主義萌芽問題討論集」上（中國人民大學中國歷史教研室編、一九五七）に收められた李競能氏との共著になる「中國封建社會內資本主義因素的萌芽」という論文に目を通したことがあるだけである。これは中國の資本主義萌芽開始の時期を明清時代にもとめる論文が多い同論集の中で唐宋時代の商品經濟の發展から説き始め、資本主義萌芽の歴史的前提が唐代に形づくられていたというかなりユニークな觀點を提示しているものであった。これ以外の論文

を「東洋學文獻類目」などによつてしらべてみると、「研究中國經濟史的意義及方法」（「中國經濟」二一九、一九三四）、「由經濟上考察中國封建制度生成與毀滅的時代問題」（「國立中央大學社會科學叢刊」一一一、一九三五）、「中國歴代的銀幣及銀問題」（「社會科學叢刊」二一一、一九三六）などがある。最初の論文と思われるのが出た一九三四年は、いわゆる中國社會史論戰につづいて雑誌「食貨」が創刊された年で、中國經濟史研究の勃興期にあたる。したがつて傳氏は中國における經濟史研究の先驅者の一人と言つてよいであらう。本書下冊の後記によると、現在は北京經濟學院中國古代經濟史研究室に所屬しているようである。

ところで本書は著者の長い經濟史研究の成果を集大成したもので、時代は殷代から清代にわたり、各時代の經濟に關する基本的な問題を取扱つてゐる。その目次を見てみると、次の通りである。ただし論文番號およびページ數は私が附したものである。

上(1)有關中國經濟史的若干特殊問題(代序) (ページ數二二、以下ページ數略)

(2)殷代の游農與殷人の遷居 (二九)

(3)井田制與農奴制 (五八)

(4)中國土地私有制的發展與地主制經濟 (一〇三)

(5)地主制經濟的特點及其剝削的殘酷性 (五〇)

(6)中國歷史上幾次巨大的經濟波動 (七八)

(7)中國古代城市在國民經濟中的地位和作用 (六六)

下(8)中國工商業者の行及其特點 (一〇六)

(9)古代貨幣經濟的突出發展及其對社會經濟所產生的深遠影響

(六一)

(4)貨幣經濟の衰落與實物貨幣の代與 (五三)

(1)抑商政策的產生根源、貫徹抑商政策的三項制度及其對商品經濟發展的影響 (六一)

(2)有關資本主義萌芽的幾個問題 (四〇)

附錄(1)歐洲封建社會的基本經濟規律及其運行 (三〇)

附錄(2)封建經濟危機的發展與封建制度的分解 (三一)

次に西歐を扱った附錄二篇を除いて各論文の内容を要約してみよう。

二

(1)は序言に代わるもので、まずこの書物の意圖をのべ、次いで論文で取扱った主要な問題を八つにまとめ、簡単な説明を加えている。後者については(2)以下でふれるので、この書物の意圖を見てみる。中國の生産方式の歴史は他の國のと基本的には一致しているが、それぞれの生産方式の具體的な表現方式には大きな特殊性が反映している。そこで中國經濟史には他の國と相違する重大問題と特殊問題が存在している。重大問題というのはそうした問題が中國の社會經濟機構の形成・發生に重大な作用をなしていること、社會經濟制度の發展・變化に深い影響をもつことである。特殊問題というのは中國の經濟制度・經濟問題を外國とりわけ西歐各國のと比較すると、機構形態、運營方式、支配している經濟規律、發展の道筋などが相違することである。そこで著者は(2)以下の論文でとりわけ中國の社會經濟制度の歴史を西歐のと比較することによってその特殊性を闡明しようとしたという。

(2)は股人の遷徙の原因を考察することを手掛りとして股代の農業

・社會を研究したものだ。股人の遷徙は契より紂王まで一六回數えられるが、その原因についていろいろな説があるけれども、最有力なのは王國維の河患を避けたとする説である。しかし股代大きな河患はなく、遷徙の地點も河から離れ、地勢の高いところ多く、むしろ意圖的に沿河一帯に移住しようとしていることから、河患ではなくて經濟的な原因にもとづくとする。つまり股代は農業社會であるが、粗放な原始農業である。農具は木器・石器・蚌器で粗末であるが、それより重要なことは耕作方法の原始性である。甲骨文に「焚」と見えるのが火耕つまり焼畑で、これが當時の農法である。この農法は地力が衰えると、他の土地に移住するもので、「Shifting Cultivation」もしくは「Shifting methods of farming」と呼ばれ、著者は「游農」と譯す。また土地は移住するため一時的であるが氏族の公有である。直接の耕作者は奴隸であるが、股代、奴隸制は充分發達しなかった。それは奴隸も氏族の占有であること、賣買が行われず、俘虜・罪人の來源では限りがあることによる。そこでギリシア・ローマのような大奴隸主、大土地所有者に發展できなかった、と考える。なお中國古代の奴隸制度は崩壊した後、殘存が長く、近代にまでいたっている、とも考える。

(3)は井田制を通じて西周における莊園制・封建制の成立を論證しようとしたもの。まず「詩經」農事詩を史料として、農夫は實際上自分に屬する土地をもつこと、實際上もしくは法律上自分の所有に屬する生産工具をもつこと、領主の公田を耕作するとき、自分の生産工具を用いる必要がない上、自分で食事を備えることができること、自分の運搬用具を用いて無償で領主のために物品を運搬すること、私田の收穫物は一部を貢賦とする他は自分の所有に歸するこ

と、自分で自分と家族の生活に責任をもつこと、などを論じ、「詩經」農事詩の農夫は農奴にあたるという。次いで土地制度にうつり、井田制が西周の土地占有の主要形式とし、それが中世西歐の莊園制と性質・作用・組織形式の點で大體同じであることを「孟子」滕文公上、「穀梁傳」宣公十五年の記事などの分析により論證しようとしている。それは井田が「公田」と「我私」の矛盾統一體であること、井田の中心の公田に廬舎が設けられていること、農奴は公田の勞役が終つてから私田を治めること、井田は孤立的な自給自足の經濟單位をなすこと、農夫は互に仕事の上で、生活の上で援助し合うこと、農繁期には集團勞働が行われること、土地利用の方式が村落の周圍が耕地、耕地の外が公地の草地と牧場、その外が森林と荒地、土地の耕作方法は「三田制」つまり「蓄」「新」「畚」の三種であること、の七つの角度から行われている。最後に周初に農奴制が出現した原因として、殷周革命はゲルマン人がローマ帝國を征服したのと同様、文化的・經濟的に低い部族が高い部族を征服したのと似ており、周人は被征服部族に對して封建的統治關係を行わざるをえなかったこと、また周人は殷人の奴隸制が瓦解しているのを知っていたこと、があげられている。

(2)の西周を封建制成立の時期とする見方は中國の特殊性をとらえているというよりは、むしろ中世西歐との同一性を指摘するものである。中國封建制の特殊性はむしろ東周以後において展開する。したがって著者は西周を領主制經濟、典型的封建制の時期と呼び、東周以後、清代までを地主制經濟、變態的封建制の時期と呼ぶ。東周以後の經濟史の基本的な問題については(4)の論文で取扱われている。

三

(4)は中國の大土地私有制の發展と地主制經濟を論じたもの。西歐封建制の經濟機構は終始、領主制經濟であつたのに、中國では戰國以降土地が自由賣買となり、地主制經濟になる點、中國封建制の特色があるとし、土地賣買による土地私有制が發展した秦漢時代から明清時代までの土地制度・土地問題を詳細にあとづけている。まず秦漢時代という人たちによりどのようにして大土地所有が行われたかをのべ、個人の場合は購入が主要來源だったとする。またそれに對する國家の對策として限田・抑商政策・富豪の遷徙をあげ、その限界を指摘している。次に六朝における土地私有發展の情況をのべ、さらに北魏から唐にいたる均田制と土地兼併に對する作用にうつる。北魏の制度について、①私有制を否定するものではないこと、②賣買の範圍は制限するが、賣買を否定するものではないことを指摘し、土地問題につき、いくらか有效なのは荒閑無主の公田を土地をもたない農民に分配し、土地の荒廢を減少し、農業生産を促進し、階級矛盾を緩和させる點、土地の紛争を解決する點、隱漏の戸口を檢括して財政收入を増加させる點にあるとし、制度の實施は疑問だが、實施の結果は公田の一部が私田に變り、私有土地が縮小するのではなく、むしろ擴大するという。唐の均田制は北魏のと晉の占田制をまぜ合せたもので、立法の精神は實質的に後退していると見る。永業田だけでなく、口分田も賣買でき、實際上は土地賣買の一切の制限が排除されているし、また田制は唐代、大量の無主の荒田がなく、人口増加もあり、空文であつて、豪強の土地兼併には何らの作用がなかったという。つづいて均田制廢止後の唐代から

宋・元を経て明清にいたるまでの土地賣買と土地兼併の進行がのべられている。そして土地が各種財富の中、最も安全な保障となったため、それを基礎とする地主制經濟が長期に變ることがなかったという。

(5)は(4)の補足で、地主制經濟の剝削、地主制經濟の土地經營方式、中國の社會經濟發展遲滯の内因と外因などの諸問題を取扱ったもの。剝削については、領主制經濟では勞役地租で、制限があるが、地主制經濟では實物・貨幣地租となり、その率は領主制經濟の場合より重く、百分の五十よりは低くなく、經濟外のものであることをのべる。土地經營方式については小農經濟が長期につづくとし、地權の分散の原因は土地の自由賣買と多子繼承制度が關係し、經營單位の分散は農民の貧困にあり、佃農であれ、自作農であれ、大型農場を經營する力量がないことによるという。最後に社會經濟遲滯の内因を地主制經濟から生まれた土地經營に、外因を天災・兵禍・疾疫などにもとめてゐる。

(6)は地主制經濟がつづいた二千餘年間に於ける天災・兵禍などにもとづく經濟波動を描いたもの。

(7)から(11)までは地主制經濟の時期に於ける中國の都市、行、貨幣經濟、抑商政策を扱っている。

(7)は古代都市の國民經濟に於ける地位と作用を論じたもの。中國封建制の特色の一つは都市の性質と發展の道筋であるとしているが、中世西歐の都市は商工業の中心であり、封建領主から獨立した自由な都市であるのに中國の都市は終始封建統治機構の中にあるとし、中國歴代主要都市の特色に言及している。したがって次に都市經濟の特色として市場・商工業・商工業者に對する政府の干渉や管

制の問題が取上げられ、最後に都市經濟の國民經濟に於ける作用・影響が① 獨立した經濟體系をなさないこと、② 獨立した商工業がなく、商品經濟の發展が制限されること、③ 西歐のような兄弟會式行會制度がないこと、④ 行會制度を缺くことが經濟發展上、有利な面と不利な面があること、などにまとめられている。

(8)は(7)にも見える中國商工業の行とその特色を扱ったもので、本書の中、最も長編である。組織としての行の發生を唐代にもとめ、いくらかの共同の社會組織・宗教活動をするが、營業は自由で、したがって同行業者間の貧富の差が大きいこと、行以外の人の資本の使用が禁止されていないこと、などが西歐のギルドとの相違點としてあげられている。次いで宋・元・明の行の目的、組織と活動、西歐のギルドと比較しての特色などを考察しているが、とくに最後の問題について宋・明清の場合を見ても。宋のは① 同一行に大戸・小戸があつて、會員の經濟的地位が異なること、② 各行大戸により操縱され、各種負擔が大戸により決定されること、③ 大戸は市場を壟斷し、物價を操縱するが、同行間でもはげしい競争があること、④ 中國の都市には排外的性質と市民が市場を壟斷する制度が生めないこと、⑤ 西歐の行は商品經濟不發達の結果であるが、中國のは商品經濟發達の結果であること、などである。明清のはとくに蘇州について言うと、① 同業救済の「善舉」が主目的であること、② 行規は營業を拘束するものでないこと、③ 西歐の監督は二年に一度、大會でえらばれるが、中國は官からの派遣か地方の有力者で、長期獨占或は世襲で、同行の利益を代表しないこと、などである。要するに行もしくは公所・會館をギルドと同一視する説に反對して本質的に異なるものという。

(9)は東周から秦漢にいたる間、貨幣經濟の發展をのべたもの、(10)は六朝における貨幣經濟の衰退、實物貨幣の代興、唐代における貨幣經濟の復活をのべたものである。重要なのは早期封建社會における貨幣經濟の發展という現象で、これは社會經濟機構への衝擊、土地の自由賣買、營利精神と黄金拜物教、商業資本の蓄積、高利貸活動、奴隸制の長期殘存など社會經濟の發展變化に重大な影響を與えたと見ている。

(11)は封建制を長期に存続させた國家の政策の一つ、抑商政策を歴史的に研究したもの。抑商政策の言論と施策をのべるとともにその前提となる抑奢政策の言論と施策にもふれ、さらに抑商政策の三大支柱となった禁權制度、土貢制度、官工業制度を詳しく検討し、そうした政策が商品經濟の發展を阻害した作用は低く評價することができない、としている。

(12)は資本主義萌芽を論じたものであるが、一であげた論文の訂補も行っている。雇傭勞働の發生は西歐よりはるかに早い前四世紀に出現しているが、これは資本主義萌芽の標準にはならず、商品經濟が進んだ唐代が資本主義萌芽出現の歴史的前提で、宋代が萌芽發生の主要時期、明初からアヘン戦争までも萌芽の段階に停滯していた、とする。

四

以上、本書の各論文の内容をごく簡単に紹介してみた。本書は論文集の體裁をとっているが、各論文に脈絡があり、全體として中國經濟史の體系化を目指したものであることがわかる。その體系化は近代西歐に生まれた發展段階説の一つを基軸とする。前述の

ように殷代を奴隸制、西周を典型的封建制、領主制經濟、東周から清代までを變態的封建制、地主制經濟の時期としてとらえている。これは必ずしも傅筑夫氏に特有の視點ではない。楊寬氏は新版の「戰國史」(一九八〇)で、春秋戰國の際を重要な轉換期とするのは大體一致しているが、轉換の意味について、奴隸制から封建制へとする郭沫若氏の説、封建的領主制から地主制へとする范文瀾氏の説、未發展の奴隸制より發展した奴隸制へとする(尙鍼・王仲華氏らの?)説の三つの説をあげている。傅氏の説は范文瀾氏の説に近い。

因に楊寬氏は舊版「戰國史」では范文瀾氏の説にしたがっているが、新版では郭沫若氏の説に改めている。しかし傅氏の書物の特色はそうした圖式を提示することにだけあるのではない。いわゆる比較社會史、比較經濟史の方法で、西歐と比較しての中國經濟史の具體的な特殊性をとらえようとしていることの方を重視すべきである。とりわけ殷代の奴隸制が氏族制を基調とするものであること、奴隸制は後まで殘存すること、封建制が早く西周に出現するが、その封建制は東周以後、領主制から地主制へと變り、地主制が長期にわたりつづくこと、地主制下の土地制度、土地經營の特色、地主制の時期の經濟波動、都市・行の特色、貨幣經濟の早期出現とその意義、抑商政策と社會經濟に果たした作用などが時には論理的すぎると思われる箇所もあるが明快に説かれている。

ところで各時代の個々の問題となると、多くの疑問や要望があるが、氣がついた點を若干のべてみたい。

第一に殷代について、遷徙と農業社會とを結びつけて理解しようとする。遷徙の原因について游牧説、水害説、政治的理由とする説などがあり、傅氏のような火田説もすでに程憬・陶希聖氏らの主張

したところである。傅氏の火田説の根據の一つ、甲骨文の「焚」は胡厚宣氏「殷代焚田説」（『甲骨學商史論叢』初集）では農業とは關係なく、狩獵のためだとされる。「焚」字の解釋を離れ、土地を代えることがあったかどうか、施肥を認める胡厚宣氏「殷代農作施肥説」（『歴史研究』一九五五——）は代えないと考え、天野元之助氏「中國社會經濟史殷周之部」は代えたと推定しているが、これは遷徙とはまた別問題である。さらに遷徙のほとんどは殷墟以前のつたえて、それ以後の農業社會を全く同一視してよいかどうか問題である。次に殷代、氏族制が残存し、氏族占有的の奴隸——その來源は俘虜・罪人——により農業生産が擔當されたとするが、奴隸による農業生産の裏づけがほとんど行われていないと思われる。

第二に西周封建制、領主制經濟の成立のところは西歐中世の封建制と同一のものが中國できわめて早く出現したという見解のようであるが、同一視してよいかきわめて疑問である。言うまでもなく西周の封建制度は宗法制度と密着したものである。またその經濟的基盤をなしたという井田制をつたえる「孟子」、「穀梁傳」、「韓詩外傳」などの記載を西周のものと考えてよいか問題だし、假に西周のつたえを記したとしても、西歐中世の莊園制と同一視してよい問題である。一例をあげると、西歐の *Gewandorf* と同じとする根據となつたのは、「詩經」小雅信南山の「中田有廬」の廬を廬舎に解する「韓詩外傳」の説であるが、廬は天野氏も言う通り蘆葦か壺廬か葦かの類であらう。さらに「詩經」農事詩の農夫を農奴と規定しているが、「詩經」農事詩の時代、農夫の社會的性質については異説がいくつかあり、今後再検討を必要とする。

第三に著者が最も力を入れたと思われる地主制經濟については問

題も多い。地主制經濟の早期出現については、貨幣經濟・商業資本の發展という側面からだけでなく、中央集權體制の成立と合せて考察する必要がある。またその後の長期にわたる地主制經濟下の土地制度・土地經營について、著者は視點をもつば土地私有制の發展、地主と佃農との關係に向けているが、それが主流をなしていたということからであらう。しかし戰國時代から清代までとなると、一筋縄でいかないことは著者も承知しているところで、したがって時代毎にさらに綿密な研究が必要であることは言うまでもない。ただ自作農が少なかったとし、軽く扱われていることは氣になる。さらに經濟波動に注目しているが、王朝單位であつて、もっときめ細かい分析が望まれる。

第四に都市、貨幣經濟の歴史や特色に對する著者の見解は、わが國ではそれ程目新しいものではないかも知れない。ただ著者は行とギルドとを區別し、同一視する説として加藤繁氏のをあげている。わが國では加藤氏以後、行の研究はかなり進んでおり、行とギルドとの共通點、相違點も考えている。ただし、たとえば仁井田陞氏「中國の社會とギルド」の説と傅氏のとはかなり喰ひ違ひがある。一々指摘するのは省くが、傅氏と異なり、仁井田氏は兩者とも對外的には排他的であると共に、對内的には一應平等の原則をもっていたという。行・會館・公所とギルドとの比較研究は今後さらに進めなければならないと思う。

本書は中國經濟史の基本的な問題について考えるのに多くの示唆を與えてくれるが、それとともに比較社會史、比較經濟史の方法で中國經濟史の具體的な特殊性をとらえようという最近の中國の一つの研究方向がうかがわれて興味深い。

聶 寶 璋 著

中國買辦資產階級的發生

一九八〇年一月 北京 生活・讀書・新知三聯書店 A5版 七七〇頁

黑 田 明 伸

歴史家もまた歴史的存在である以上、歴史的事實に對する評價は、それを研究對象とする歴史家の主觀を超えて彼のおかれた時代の性格からの規制を受けざるを得ない。買辦をめぐる研究もその例外ではなく、それどころかその顯著な例と言える。そしてその規制の受け方は中國近代史研究の動向を如實に反映したものであり、買辦をどう評價するかが研究者の立場の試金石であるかの如きでさえあった。

過去の買辦研究史を振り返ると、凡そ三種に分類できる。一つは、根岸佶⁽¹⁾に代表される戦前の日本人研究者のそれである。概して、買辦商人たちの傳統的性格、強い地縁結合、民族性を強調し、列強の經濟侵略に對する買辦制度の抵抗作用を論じている。こうした見解を生む背景として、一つには戦前の中國認識の限界、つまり東洋的神祕性・停滞性認識があったのであり、また一つには當時日本帝國主義にとって開港場を基盤とする「紳商」たちこそが當面の經濟上・政治上の競合對象の一つとして意識されていた状況があった。これらの研究が同時代的に一方の當事者側からなされたものであるのに對し、一九四九年以降、つまり買辦制度消滅後なされ

た二つの方向の研究は、ある意味で客觀的な面もあるが、しかしその買辦評價は、政治的色彩を帯びがちであったことは否めない。その一方の方向とは、アメリカを中心とする近代化論的觀點であり、Yen-ping Hao (郝延平)⁽²⁾に代表されるものである。アメリカの近代中國研究者の一般的見解であるが、一九世紀後半から二〇世紀にかけての列強による中國への經濟進出は、決して量的には大きなものではなく侵略と言える程のものではなかったものであり、列強の資本投下はむしろ他地域に向けられていたとし、また、經濟接觸によつて中國に與えた近代化のための連關効果を相當なものとして評價する。その基本線に従つて、買辦制度の存在は歐米資本主義側にとつてはコスト高になるものであったので、かえつて經濟進出を弱める原因となつたとする。さらに特徴的なのは、買辦層を近代化にとつて障害となる中國的傳統から脱却した、企業家精神に富み政治的にも革新性を帯びた近代化のリーダーとして扱っている點である。歐米的(さらに言えばアメリカ的)市民社會を自ら體現し、さらにそれを積極的に移入しようとする者こそを社會發展の擔い手とするが如き觀點が、新植民地主義とタイアップする面があったことは否めない。

これに對して、全面的に反對の側にあるのが、誰よりも毛澤東に代表され、黃逸峰等中國の研究者たちが主張してきた見解、すなわち「買辦資產階級」を帝國主義に從屬し國內封建支配層と連係した、農民とその他大衆と敵對する最反動層として把えるものである。極言すれば、基本的に一九四九年を解決點とする中國近代史を、南京國民黨政府・四大家族に收斂される世界帝國主義に從屬する側と、中國共產黨に收斂される勞農大衆の側とが兩極に分解し、